

45年の歩みを顧りみて

同窓新報

題字・故 上野慧賢先生

駒大高校同窓会 会報

発行所

駒沢大学高等学校
同窓会

東京都世田谷区上用賀1丁目

〒158 TEL.3700-6131(代)

振替口座 東京 8-61881

そのとき 学校は

顧問 和田 實正



の半世紀を辿ってみました。開闢を拒否した山口判事の栄養失調死、東京裁判・帝銀事件など戦後の混乱の中、新憲法・教育基本法の施行(昭22)など新しい歩みが進むとき、駒大高校は開校(23・4)、朝鮮戦争・講和会議・安保条約・破防法をめぐる闘争を生きた教材とした一期生一六名が卒業(26・3)、同窓会の発足となる。一方八教

室焼失の不運に見舞われる(27・2)

神武景氣に湧き、東海村原子炉始動の年、渋谷校舎に移転(31・4)、大学構内に建築の高校校舎に移る(37・2)まで六年間を過ごす。新安保反対闘争が激化、全学連の国会・羽田での衝突が伝えられるとともに高度成長政策が始り、なべ底景氣から岩戸景氣に一転する。開校一〇年、同窓会



衛星ヴォストークが宇宙へ飛び、初の衛星中継テレビの画面がケネディ暗殺、ベトナム戦争と世界が動き、東京オリンピック、新幹線開通、期待される人間像の教育論議、そして第二次ベトナム戦争。入学者九二五名(38・4)、M・N・O組の名がなつかしい。

駒大競技場隣接の思恵でオリンピックサッカーを観る。開校一〇年、同窓会

戦した諸君(14期生、全国で初めて修学旅行に新幹線を利用し、バス15台を連ねて九州一周の17期生、一クラス64人の答案採点を多い人は20クラス分、二、三日で片付けた先生方、よくやっとなという感慨です。学園紛争がくすぶり始めた頃、高校専用校地が実現し、用賀校舎に移転(41・9)、新たな展開が始まる。学園紛争は、東大安田講堂封鎖解除(44・1)をピークに、学園封鎖・入試中止・よど号ハイジャック・浅間山荘事件・内ゲバ・成田空港反対運動などと続き、40年代の教育界をゆさぶる。

列島は、小笠原・沖縄返還・万国博・改造論などにぎわうが、高度成長の代償が公害・環境問題として露呈し、イタイイタイ・ぜんそく・ヘドロに苦んだ。

高校進学率が高まり(50年90%)、また本校の駒大志望者が増えるに併せ、教育課程及びその展開にいろいろ工夫を加えた時期で

ある。英語の習熟度別学習、社会科・数学科・理科の科目選択、理数類型の設定、実力テスト、課外・演習講座など、学習形態は変化を続けた。また商業科希望者が減少を続け、54・3卒業を以て廃止、37・4入学の第一期から第十五期まで九六三名を送り出した。

希望者が進学できた駒大優先入学制度に制約が加えられ、入試受験(40年)、成績基準・受入れ数設定(47年)、三校統一試験実施(51年)、統一試験基準点設定(54年)、現行(平5年)は、評定平均値・人数・小論文・面接・入試受験などの要素が組み合わさっている。

一方校地を得て部活動も活発となり、体操部榎山和則君のインターハイ優勝(52・8)、ソフトテニス部全国選抜大会優勝ほか全大会出場・入賞が相次ぐ。惜しまれるのは野球部が国立高に惜敗し、甲子園出場ならず、校友を湧かせ、口惜しがらせた(55・7)

(教頭)

同窓会四十五周年を顧みて

名誉会長 秋山 彰 三



同窓会の前二十年は当時の校長であられた上野慧賢先生とともに在ったと思っている。よって同窓会四十五周年を顧みると云うことは上野慧賢先生の思い出とつながるものである。

同窓生でも上野慧賢先生を知る人は少なくなってきた。しかし私は上野慧賢先生ほど生徒の教育に情熱を傾けた先生を知らない。先生は、生徒を叱る時には顔を真っ赤にして激烈に怒るであり、知命にはほど遠い感がある。

同窓会が組織された後は、先生は必ず同窓会の会合に出席され、慈父の如き笑顔で皆の話を聞かれ、たまに話をされる時には非常に進歩的な意見を述べられたのである。私は、老いても上野先生は常に教育者として青年のように心を持っていてたと思つてゐる。私は同窓会の活動をするようになつてからこのようになつて上野先生の違う一面を見ることが出来たのである。

そこで私は、同窓生諸氏にも同窓会活動に積極的に参加され先生方と交流し、教壇に立たれていた時の先生とは違った面を発見し、学校、先生とのつながりを深めて欲しいと願うものである。それがまた同窓会を発展させる一つの要因になるのである。

同窓会の後半二十年は、私は同窓会長の務めを上野先生の無言のバックアップを受けながら行ってきたと云える。しかし上野先生及び皆様の期待に答えることが出来たかと考えると、内心忤ねたるものがある。

同窓会の後半二十年は、私は同窓会長の務めを上野先生の無言のバックアップを受けながら行ってきたと云える。しかし上野先生及び皆様の期待に答えることが出来たかと考えると、内心忤ねたるものがある。

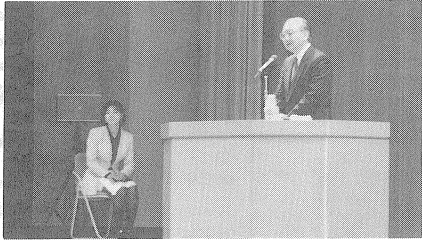
同窓会の後半二十年は、私は同窓会長の務めを上野先生の無言のバックアップを受けながら行ってきたと云える。しかし上野先生及び皆様の期待に答えることが出来たかと考えると、内心忤ねたるものがある。

同窓会の後半二十年は、私は同窓会長の務めを上野先生の無言のバックアップを受けながら行ってきたと云える。しかし上野先生及び皆様の期待に答えることが出来たかと考えると、内心忤ねたるものがある。

同窓会の後半二十年は、私は同窓会長の務めを上野先生の無言のバックアップを受けながら行ってきたと云える。しかし上野先生及び皆様の期待に答えることが出来たかと考えると、内心忤ねたるものがある。

第一回文化講演会を催して

副会長 田上 太 秀



我が同窓会は五区切りで記念会を開催して来ましたが、そこで七年度も記念会を開くと同時に、文化事業

の一環として、十一月に行なわれる母校の駒大高祭に参加する事業を計画しました。

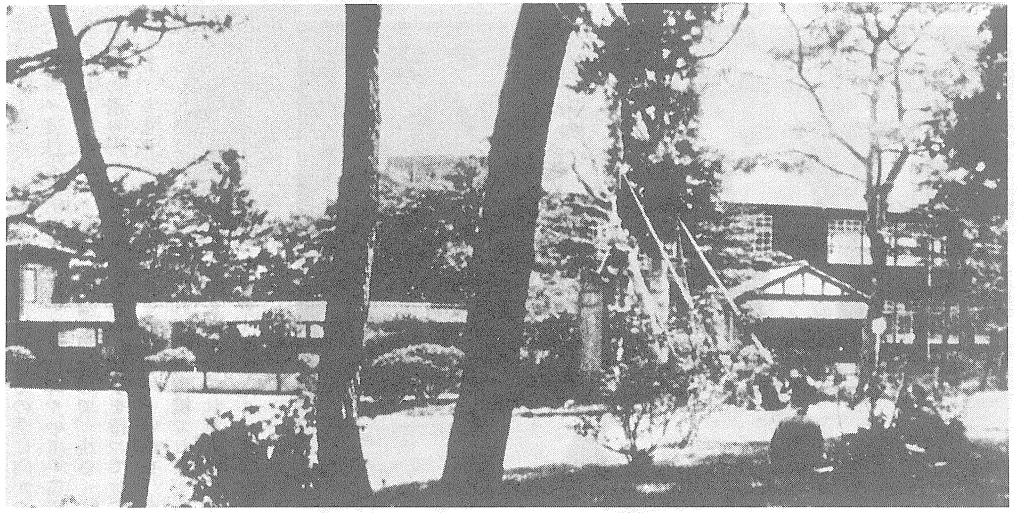
この事業は、学校法人駒沢大学に所属する大学並びに高等学校の卒業生の中で、それぞれの分野で目覚ましい活躍をされている方々を招待して、母校の生徒や近隣の人々に、いろいろなお話を聞いていただくという趣旨で、講演会を開催することにしました。

駒大高祭は毎年開催されます。したがってこの講演会も毎年行なわれることになりました。

この事業の第一回講演会が平成七年十一月三日、午前一〇時から母校の新講堂兼体育館で開催されました。

講師は山本宏美氏でした。駒沢大学小牧高等学校の卒業生で、現在、新王子製紙小牧工場に勤務されているようですが、すでに同窓生リレハンメル・オリンピックで五メートルスケート競技で銅メダルを獲得された人です。国内のスケート競技でも同窓生の橋本聖子氏とともにめざましい活躍をされた人です。

山本氏は五歳ごろからスキーやスケートをはじめ、二〇年間スケート競技に明け暮れてきたことを生徒たちの前で話されました。オリンピックに出場、国際競技に出場など世界の舞台でどのような活躍をしたのか、そして競技での戦いの相手はすべて自分と、戦いであったことなどを、ゆったりとした口調で語りかけられたのが印象的でした。若い人はどちらかというと大勢の人の前で話をして、おどろきや怖気づいて、おどろいたり、上がったりして話が出来ないものですが、山本氏は堂々として、講演慣れしている方のように見受けられました。話の中で自分を律する五箇条をあげられました。ご意見やアイデアをお寄せくださいますようお願いいたします。



同窓生の皆さん、お元気ですか。皆さんは誰しも母校の屋上に登ったことがあるでしょう。昼休みに教室の喧嘩から逃れて屋上に登り、金網に両手を掛けながら下を覗き、高さ（一六・二m）を実感する。これはくらしい。丹沢や秩父の山地に目を向け、山野跋涉に想いを馳せる。いや、もっと現実的には、学校祭の展示に必要なベニヤ板（いまは展示パネル）の出し入れで、夕日を眺めながら登ったこと。坐禅堂での実習を終え、屋上に飛び出した時の風とその空間。さまざまな回想をおもちのことと思います。

いまの屋上は以前のイメージとは大分変わりました。四カ所に防護柵ゾーンが設けられ、内に空調機（今は冷暖房完備）がうなづいています。東西の両端はこの柵により立入り禁止となりました。その代わり（？）残りの平坦面には一面に人工芝のマットが敷かれ、若草が萌えているようです。そう、ゴルフ場のグリーンに上ったような感じですが、この感触を求めて青芝に寝転び日向ぼっこをする生徒が増えてきました。完全に仰向けで顔を覆ったり、甲羅干しの群れもみられます。女子生徒も大胆です。でも会話はなかなか楽しそうです。金網に手を触れるとビリビリッと静電気が強いショックを与えます。私も持っていた鍵を落としてしまったことがあります。牧場の防護柵のようですが、これはどうも空調機の回転摩擦が影響しているようです。

私の地理はいつも一年生です。四階ばかりの授業です。何十年も最上階ばかりです。ついでに五階（屋上）六階（坐禅堂の上）も授業の場に含めてしまいました。足腰が鍛えられ、逆になるのか不安です。私が屋上に登るのは、山や街を眺めるためです。昭和四十八年から必修クラブが始まり、「東京から山を見る会」を開講して生徒達と山の展望を楽しみました。伊豆・箱根・富士・丹沢・奥多摩・秩父・三國・日光・筑波・房総などの個々の山を確認した時の喜びは、数学の問題を解いた時の喜びに通ずるものがあります。感動的なは何と言っても赤石山脈（南アルプス）や男体山（日光）が眺められる時です。一年のほんの僅かな

建造物で、それからは人間の営みや感情が伝わってきます。地域の変遷や行政、環境や交通、エネルギーや水の問題、さらには利害関係などが資料を探ると浮び上って一層面白くなります。用賀駅頭に大きなビルが建ったのは一九九三年でした。SBS（Seibu Business Square）タワーと呼ばれ一二〇mの高さのインテリジェントビルです。三軒茶屋には赤レンガのキャロットタワー（一二四・四m）が区の施設として建設されています。こんな動きから私はいま、「東京三六〇度」と称して特別講座を開いています。毎週土曜日の三・四時限目（本校では特別講座として）を用い、生徒と共に眺望を楽しんだり展望図を作ったりしています。

清掃工場は面白いですね。環境問題がうるさいだけに、こもイメージチェンジをはかっています。東京の清掃工場の煙突（一五〇mのものが多い）を六本確認しました。遠くは練馬の光が丘です。煙突の彩色にも工夫が見られます。世田谷清掃工場の煙突（一〇〇m）は四区分四色（白・水・緑・灰）で迷彩され、その色合いの境界に丹沢山地の稜線が連なり、見事な貼絵を見せてくれます。これらの清掃工場がほとんど発電していることも興味あることです。

臨海地区を眺めると、レインボーブリッジをはじめ鶴見つばさ橋、MM21のベイブリッジなどの橋脚が見事に海を背景に浮び上がります。橋を支えるタワーの型にそれぞれ特色があります。しりした箱型、鶴見つばさ橋はその名のとおり、二羽の鶴が天空に向って飛び立つ型を表しています。二本のタワーから幾本も斜めに

流れる架線が三角形をつくり、ちょうど鶴が両翼を広げたようです。遠くから眺めると海水の汚染とは別に夢を与えてくれます。横浜のベイブリッジは、H字の二本のタワーが橋を抱きかかえています。YOKOHAMAの象徴となり、ベイブリッジ現象という経済効果を生み出したことは周知のとおりです。

かつて日本一の高さを誇ったビル、サンシャイン60（二四〇m）は、都庁第一本庁舎（二四三m）や、横浜ランドマークタワー（二九六m）に高さで追い抜かれてしまいました。新宿副都心のビル群から少し離れ、淋しそうに建っている姿に時代の流れを感じます。横浜グランドインターコンチネンタルホテルは帆船型で、ランドマークタワーや国立横浜国際会議場とともに、デザインの斬新さや充実した機能が注目されています。

これからの双眼鏡とカメラをぶら下げて、屋上通いが続きそうです。登るたびに新しい発見があるのも楽しみです。一万八千余名の同窓生の御健祥を祈って、発信を終わります。（一九九六・一・二四）

リレハンメル冬季オリンピックから二年が過ぎ、今はオリンピックに出場した事を忘れてしまいうらい、オリンピックとは別の道を歩み始めています。私にとってオリンピックは、一つの大切な思い出となり経験したことは、宝物となりました。私が出場した競技はスピードスケートです。スピードスケートを始めたきっかけ、競技を本格的に行う様になり、ス

スピードスケートというより最初は競走というより遊びの延長で、姉や兄に連れていかけてもらっていました。スケートの大会が始まるのは、だいたい小学校四年生頃からになります。大会というよりは、友達に会えたり、知らない場所に行けるのが嬉しくて、大会はメインではありませんでした。練習も冬だけの練習で夏は陸上やソフトボールなどをして遊んでいました。

いつ頃からスケート中心の生活になったのでしょうか。それは、中学一年の全国大会で優勝した時からだったと思います。初めて出場した全国大会で三千メートルを優勝したのが、私のスケートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を大きく変えたきっかけとなりました。表彰台の上で「これを履いて遊んでいました。三歳頃だったと思います。四歳の誕生日には私は、」

「大きく変わったスケート

のオリンピック選手になり

たい」と言っていたそうで

す。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というより

遊びの延長で、姉や兄に連

れていかけてもらっていま

しは、だいたい小学校四年

生頃からになります。大会

というよりは、友達に会え

たり、知らない場所に行

けるのが嬉しくて、大会

はメインではありません

でした。練習も冬だけの

練習で夏は陸上やソフト

ボールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中心

の生活になったのか。そ

れは、中学一年の全国大

会で優勝した時からだっ

たと思います。初めて出

場した全国大会で三千メ

ートルを優勝したのが、

私のスケートだったのが

、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけと

なりました。表彰台の上

で「これを履いて遊んで

いました。三歳頃だった

と思います。四歳の誕生

日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

たい」と言っていたそう

です。

スピードスケートと言っ

ても最初は競走というよ

り遊びの延長で、姉や兄

に連れていかけてもらっ

ていまは、だいたい小学

校四年生頃からになりま

す。大会というよりは、

友達に会えたり、不知

名な場所に行けるのが

嬉しくて、大会はメイ

ンではありませんでした

。練習も冬だけの練習

で夏は陸上やソフトボ

ールなどをして遊んで

いました。

いつ頃からスケート中

心の生活になったのか

。それは、中学一年の

全国大会で優勝した時

からだと思います。初

めて出場した全国大会

で三千メートルを優勝

したのが、私のスケ

ートだったのが、勝

ケートの生活、考え方を

大きく変えたきっかけ

となりました。表彰台

の上で「これを履いて

遊んでいました。三歳

頃だったと思います。四

歳の誕生日には私は、

」

「大きく変わったスケ

ートのオリンピック選手

になり

最近の母校は

生徒募集を中心として

顧問 神谷道倫



成人の日になんて、総務庁が今年一月一日現在の二〇歳の推計人口を約一八八万と発表した。それは昨年より一三万人少なく、今後も新成人は減少が続いて、西紀二〇〇五年には一五〇万人を下回る見通しであるという。

少子化の傾向はかくまで進行していることを示している数字であるが、我々が当面考慮にいれなければならぬのは、二〇歳どころかそれよりも五歳若い中学三年生の人口の推移である。都内公立中学校三年生の数の年次統計を見ると、平成七年度において既に、ピークであった昭和六一年（一五万七千七百人）のほぼ三分の二の人数となり、平成一四年度以降にはピーク時の半分以下になってゆくという深刻な数字が示されている。

学齢人口が減少し、既存の受け入れ態勢があるということは、単純に考えれば、学級定員を減らした上に施設も十二分に活用でき、ゆ

とりのある充実した教育の実施が可能ということになるはずであるが、現実には必ずしもすべてがその方向に動くということにはなっていない。平成七年刊行の『都立高校白書』を見ても、採算をある程度度外視してよ

いはずの都立高校さえも、現状のままで、教育の質的維持が困難となり、将来的には廃校にせざるをえない学校が生じかねないという危機感を持って現状を直視し、今後の長期構想を策定してゆくという強い姿勢がうかがわれるのである。

大分前置きが長くなったが、現在我が校の生徒募集をめぐる状況の概略は以上の通りであることが述べたかったためである。公立高校、私立の中高、国公私立大学を問わず、学齢人口の減少期を迎えて、質的水準を保ちつつ生き残りを図るための対策を講じる必要に多かれ少なかれ迫られている。いわば一種のリストラが要請されているのであるが、一般企業とは異なり、私学といえども公教育の一端を担う学校の場合は、採算という視点以外に、前向きな教育理念が伴わなくてはならないのは必至のことであろう。

本校は平成七年度から共

学制に移行した。卒業生諸兄の中には、従来の男子校としての伝統から考えて信じがたいこととして、ある種の衝撃をもって受け止められた方もいるかも知れぬ。しかし、平成六年度の教育課程から男子も家庭科が必修となったこと、学校教育は、大きな流れとしては従来より以上に男女共学の方向に風が吹いているのは自明のことと言ってもよい状況にある。無論その中で男女別学の私学の存在価値が失せてしまうわけではないが、文系大学の付属高校である本校の場合、付属の高校として女子も育成して大学に送るという形態は、駒澤大学の学生数の男女比からしても、むしろ自然の形ということができるだろう（その上女子のみを受け入れる短大の存在もある）。女子の受け入れを機に施設の拡充を図つたのは当然である。新体育館を始めとする新たな施設の数々は、これまた卒業生の瞳目するところがあるはずである。

本校の共学制制は、社会の大きな流れに乗るとともに、本校に内在する可能性を引き出す形で実施された。共学制制第一年目は幸いに多くの応募者を得て、外形的には所期の目的を達することが出来たと云ってよい。また女子生徒の入学により学校全体が活性化したのも事実と言つてよさそうである。

だが、共学制の実施は教育内容充実のため、本校が今後継続してゆかなければならぬ対応策のほんの始まりにしか過ぎない。共学制という形式にどのような内実を盛つてゆくか、それは今後の適切な対応の如何にかかっている。

教職員一同の内部努力は当然として同窓生諸兄のご協力ご支援を大いに期待するのである。

(8・1・15稿)

定年を迎えて

顧問 菊地祐吾



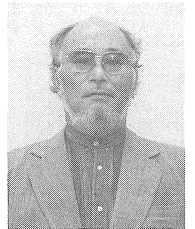
時の流れは早いもので、昭和三十六年四月奉職以来三十四年間、気がついた時には定年を迎えていました。まさに「光陰箭の如し」の思いで一杯です。

この間、大過なく勤める事が出来たのも一重に多くの方々の御指導、御鞭撻によるものと厚く御礼申し上げます。

顧みますと、この足掛け三十五年の思い出はまさに走馬灯の如しです。就中、私は大変恵まれた時代に奉職できたこと感謝しています。世はまさに岩戸景気などといはれた経済の高度成長

学校を去るにあたり私の思い

池田茂雄



生涯の青春時代を若者と共に過ごさして戴き教員として停年まで、大過なく終了を迎えようとしております。かえりみれば人生に大きな目標を自分なりに掲げてよき教師として燃ゆる想いを秘めて頑張ろうとス

タイドしたのですがその思いだけで空転した、反省だけ日々残ります。でも、毎日毎年、誠実に明るく一生懸命若者達と接して来たことだけは私のいつわらない生き方だと自負はしております。でも要は教師は生徒(若者)あつての存在で、若者がその教師からどのような影響を与えられるかに

よって、その教師の存在が鮮明になるものと思われま

す。私も、人生に生きる先輩として果立っていった卒業生が学校の想い出の中で「ボーイングII」私(のあだ名)の印象と生き方が、わが学校の追憶と共にその「青春」により触れ合いになったことを念願するのみであります。さらに在校生の若者達に駒高生気質の伝統的なやさしさと素直さにさらし挑戦するフアイトを期待したいと思ひます。本校も昨年より男女共学となり学校も新しい時代をむかへようとしています。どうか在校の若者諸君頑張つて下さい。この時期にお別れるのが残念です。フール駒大高校。フール駒高生。フール卒業生。

校友会活動



男女共学元年もあと二ヶ月余を残すだけ。新一年を迎える入試も間近に迫つて認識するものであります。これはまた同時に誰れでもが痛感する、時代を超えた教育の真理と考えるところでもあります。

平成七年十一月二十三日に新高輪プリンスホテルで開催されました祝賀会には総勢二百三十名の出席を頂き駒大高校からは、羽住校長先生、秋山名誉会長、施禮会宮田博太様、白浜正幸先生、浦敏之先生、その他多数の先生方そして柔道界からは猪熊功先生はじめ高田連、学柔連、都柔連、世田谷柔道会、警視庁の先生方、会津若松柔道会の先生方、更にはご父兄の皆様方その他多くの皆様方のご出席を仰ぎ、かくも盛大に挙げて下さったこと、ここに謹んでご報告申し上げます。

さて本年度の上半期は昨年を上回るさい先の良いスタートとなりました。柔道部を筆頭に、ゴルフ、バスケット、ソフトテニス、バレー、体操、陸上、文化局では視聴覚が都の代表として関東

大会に駒を進めました。野球部もあと一歩の所で都四商に負け甲子園の夢は絶たれたものの、本年誕生したての女子チアリーと吹奏の応援を背に大健闘をしました。新設された女子ソフトボール同好会が本校で熱い汗を流すなか、鳥取・島根のインターハイでは陸上バスケット、ソフトテニス、バレーの代表として活躍。一年生の大半が女子となった吹奏も都の予選では見事金を獲得。体操は女子の白田さんが、床で五位の成績を残しました。

共学一年のスタートとなる文化祭では、基本にかえり「展示中心」で取り組みました。同窓会の計らいで講演会には姉妹校のOGであり、リレハンメルオリンピックで活躍された山本宏美さんをお招きでき、華を添えることができました。

校友会新役員には女子二人を含む一〇人が就任。来年度の活躍が楽しみです。国体(福島県)にはソフトテニスで三A小島、二G新井。体操競技では二A吉岡。バスケットでは三A小山田、三C岩波君が出場。剣道には成人二部で井上誠二先生が出場。井上先生は準優勝の栄冠に輝きました。

新人戦ではバドミントンがCブロックで団体優勝。体操部も団体総合優勝。個人では跳馬・床では一丁松原君が優勝、吊り輪で一A鈴木君が第三位に入賞。

柔道部はOB会創設三〇周年を迎える本年、新高輪プリンスで記念の祝賀会を挙行。これには日本柔道界の重鎮・猪熊功氏、関根忍氏等沢山の来賓が参加。全国の貧者ソフトテニス部は、OB・高川経生氏の天皇杯と世界大会共の優勝を祝しホテルニューオータニで盛大に祝賀。両部を含め伝統厚き本校の活躍が果たした一年でした。

会費・寄付金納入者芳名

前号記載以降
平成八年一月十五日現在
平成七年九月六日から平成八年一月五日までに納入された年会費です。今までに複数年度分納入された方がたくさんいらっしゃいます。氏名は省略させていただきます。

- ### 会費納入者 (敬称略)
- (一) 前 尚史・和智健次
吉田吉恵・石井 薫
 - (二) 藤岡 勇・佐々木正純
 - (三) 島田寿三・河本和磨
 - (四) 田上太秀
 - (六) 川内俊孝・久野 実
 - (九) 白井 旭
 - (十) 徳山康二・向井三陽
 - (十一) 金剛康三・佐竹瑞生
葛西治雄・美原 清
 - (十二) 井関靖史・納谷僚一
 - (十三) 和田修造・表 勝昭
石田充法・三石 勝
 - (十四) 志治孝昭
 - (十五) 諸岡泰寿・清石寛孝
白杵正孝
 - (十六) 前田雅信・白木誠一
今 信善・宮田利徳
 - (十七) 石東正明・南條弘至
高橋文彦・松村秀一
石井光彦・市村喜己
中村重夫・堤 義明

- (十七) 小松原光良・川邊章三
金子憲生・小林清光
木下陽一・野村利明
岩崎孝和
- (十八) 秋成知通・坂田勝夫
續 道雄・高橋 功
中野安糸・前田隆司
多田 豊・安西久文
鈴木正人
- (十九) 石川 豊・脇田正治
加藤秀宣
- (二十) 星野隆光・法雨 浩
- (二十一) 斎藤 清・伊藤誠司
田中機一・増田朝光
飯塚辰男
- (二十二) 高橋正之・山崎 猛
- (二十三) 小笠原富男・三角知令
大上 晃・伊藤良一
内田芳孝・飯塚明彦
海老 保
- (二十四) 池野 悟・渡辺裕司
森 吉仁・菊地善彦
星川 稔
- (二十五) 北 晴久・栗山洋一
- (二十六) 佐藤元泰
- (二十七) 森田信幸・木村 剛
恩田治孝・飯田 浩
- (二十八) 由良一洋・田崎博識
田島龍爾・桑原伯州
横山和弘・神谷光伸
森光哲伸・大野秀夫
椎本邦一
- (二十九) 野原正恵
- (三十) 都井孝治・杉山志津男
川上修詮
- (三十一) 大倉正敬・鈴木久人
吉谷伸夫
- (三十二) 権田匡俊・西有善裕
矢口敦弘
- (三十三) 高橋正実・松原秀樹
北村秀生・元井康之
林 昇・藤岡康雄
佐藤明彦
- (三十四) 秋山裕二・南雲賢一
- (三十五) 大崎泰輝
- (三十六) 須藤 昭
- (三十七) 松原貞勝・遠藤威信
秋山忠雄
- (三十八) 磯部 忠・高橋賢一
清水庸弘・遠藤新志
吉川佳毅
- (三十九) 宮本貴昭・竹田直仁
- (四十) 高橋淳史・阿彦尚志
藤田吉隆・鈴木一功
羽場敬仁・小川隆行
- (四十一) 林 卓男・田代 稔
萩原裕史

- ### 各種会議報告
- ☆平成七年度
- #### 常任幹事会
- 第一回 四月四日(火)
出席者八名 委任状八通
六年度事業報告
六年度決算・監査報告
役員改選
七年度事業計画
四十五周年記念事業委員会設置
七年度予算
その他
- #### 役員会
- 第一回 七月二日(金)
出席者七名
記念総会報告
附属三校交流会
文化講演会
柔道部OB会三十周年記念式典助成
その他
- #### 第二回 九月二日(木)
- 出席者九名
規約改正
予算支出項目確認
文化講演会準備
- #### 第三回 十二月十九日(火)
- 出席者十二名
予算額支出超過
会計処理・監査規程
講演料支払規程
会計支出の実態報告
同窓新報二一〇号報告
同窓新報二二〇号計画
同窓新報二二〇号計画
四十五周年記念事業委員会
第一回 四月二〇日(木)
出席者七名
記念事業内容の確認
役割分担
- #### 第二回 五月八日(月)
- 出席者七名
記念総会々場下見
- #### 第三回 五月二九日(月)
- 出席者七名
案内状送付
総会の準備状況確認
文化講演会準備
- #### 第四回 六月十六日(金)
- 記念総会報告

天皇杯を受けて

高川 経生



平成七年九月二十九日、浜松市において天皇賜杯全日本総合選手権大会が行われた。過去六回の大会に出場しているが、昨年、一人一年目の年、今までソ

フトニス中心の生活から打って変わり、また住み慣れた地を離れることにもなりいろいろ不安からか、決してベストコンディションといえる状態ではなかった。そこで自分自身、結果ばかりを考えず、とにかく一試合一試合ベストを尽くしていくことを心がけた。結果、危ない場面も数多くあったが、七度目の挑戦にして初の優勝を手にしたことができた。

私自身、この大会が最大の目標であり、大きな夢であった。この優勝の裏にはさまざまな経験やいろいろな方々のご指導のおかげであつたと心から感じている。この結果に満足せず新目標を定め、日々精進していきたい。これから心掛けていくことを誓った。

天皇杯優勝祝賀会開く
十一月二六日ホテルニューオータニで全日本総合選手権大会(天皇杯)でもみごと初優勝した高川氏の祝賀会が開催された。二百名をこえる参加者があり、高川氏はこの声援に答えるべく精進することを誓った。

国体で準優勝

井上 誠二



(三十三期)組
非常勤講師

「友よ ほんとうの空に」とのこの爽快感を得られたと、これは、諸先生方のご指導のおかげで、第五十回国民体育大会が福島県で開催されました。この記念すべき大会に出場できたことは、たいへん感慨深いものがあります。

かつて、あともう少しという所まで進みながら出場できなかった経験があり、記念大会出場の大チャンスと、今年、十三年前の悔しさと相俟って、是非優勝したいという気持ちで、精一杯の力を出し切りました。

結果は、地元福島に破れ、準優勝であったものの、後

ご冥福を祈ります

- 阿部 靖幸 元国語科非常勤講師
岩淵 育男 元英語科非常勤講師
平成六年度九月三十日逝去
去
梶山 真琴 元理科教諭
筋委縮症(ALS)で
平成六年六月一日逝去
桜井 秀男 一期
淵本 智平 二期
平成七年八月二九日逝去
小久保 俊三郎 三期
関口 享一 十一期B組
平成七年四月二三日逝去
渋谷 孝一 十三期B組
平成七年六月十九日逝去
山口 勇 二期D組
地下 弘展 二期A組
平田 安志 四三期J組
交通事故
平成七年十月十日逝去
以上の方々が本年度内に通知をいただいた方々です。材に行きます。

ゴルフクラブ会員募集

現在二五名の会員が登録されています。会長杯争奪ゴルフコンペを年二回程度開催する予定です。ゴルフに興味ある方は是非登録して下さい。

コンペ開催時にお知らせします。同封のハガキのゴルフクラブ登録欄に〇印をつけて返送するだけです。

(同窓生だより) 原稿募集

新報発行は年二回(三月と十月)の予定で活動していますので、皆様の協力をお願いいたします。

編集委員会では次の原稿を募集中です。

会員の近況・会員の出版入賞・入選・店舗の紹介等どんなことでも結構です。お店紹介は編集委員が取材に行きます。

名簿 残部あり

平成七年度刊行の名簿が事務局に多少ありますので購入希望の会員は同封の振込用紙をお使い下さい。

代金は四千八百円です。事務局に会員より苦情が寄せられています。名簿の利用には他人の迷惑にならないようにお願いします。

編集後記

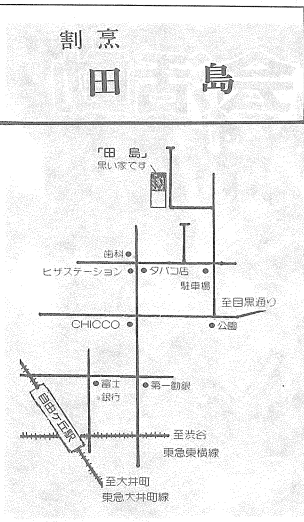
町に遊ぶ子供たちの姿が見られなくなって久しい。特に小学校高学年以降の児童が遊ぶ姿は少ない。夜遅く大きな音を聞いた翌朝、朝の子どもたちの姿ばかり目につく。ガキ大将が子供社会のルールを教えることで、集団の中でルールを教えることで、集団の中で生きる術を鍛えられた。ガキ大将もそのいかにたを、そして、忍耐力や協調性、弱者を慈しむ心を学んだように思う。

今、子供たちに必要なのは群れて遊ぶことだ。そのなかから、長幼の順や、仲間同士の助けあう事を学ぶことだ。

同窓生のお店探訪

東横線自由ヶ丘の高級住宅街にある割烹料理店を紹介してみよう。僅か駅から五、六分の所に、四年前この場所に開店した「田島」というお店がある。自宅内に店舗があつて、店内は静かなムードで、カウンター席のみであり、七・八名で満席になる。ゆっくりと語りながら楽しめるお店で、ことを伝えるとサービスが低価格であるが、最上の材料を使った料理を一品ずつ出してくれるので好評である。予約するときにお好みの物を言っておけば用意します。

目黒区自由ヶ丘三三六
TEL 三七一八一九九一四



同窓新報編集で一番の目標は会員に読まれる新報作りである。会員からの同窓新報を楽しみにしていますとの便りが何よりのヴィタミン剤である。皆様からの便りをお待ちしています。